イリオモテヤマネコを守る国有林に

琉球大学理学部　伊澤　雅子

現在、奄美・琉球として世界自然遺産の候補地にノミネートされている地域の一つの重要な核が琉球列島の南端近くに位置する西表島である。西表島は面積がわずか 284 ㎢であり、世界地図で見ると見えなくなるくらいの小島嶼である。しかし、この小さな島にはぎっしりと生物が詰まっている。湿潤亜熱帯の常緑広葉樹林から河口域のマングローブ林までの森林は高い生産性を持つ。また、生物多様性の高さは他に類を見ず、その生物相の固有性と希少性で世界に知られている。

イリオモテヤマネコ、カンムリワシ、リュウキュウキンバト、セマルハコガメ、キシノウエトカゲ、コノハチョウ、ニッパヤシ群落、ヤエヤマヤシ群落など天然記念物に指定されている動植物も数多い。この島の生物多様性を生み出してきたのは、世界でも限られた地域にみられる湿潤亜熱帯という気候、琉球列島の島々の中では高い山をもつ複雑な地形、これまで大陸とつながったり離れたりを繰り返して来たという複雑な地史の上に現在の姿となった島嶼群の一部であるということであろう。もう一つ、近年になってからの要因としては、人間活動の影響が少なかったことである。この最後の要因に大きく関わっているのが国有林である。

西表島国有林は面積が 245 ㎢であり、島の 90%近くが国有林であることになる。さらにそのうちの 205 ㎢が西表島森林生態系保護地域である。すなわち、この島の森林の大半とそこに棲む生物たちを守っているのが国有林である。これまで、イリオモテヤマネコの生息密度は低地部で高いと言われて来た。しかし、海岸や集落付近でもヤマネコが生息できるのはその背後に広大な森林があるからである。また近年の調査からは西表島全域にイリオモテヤマネコが生息している状況も明らかになって来た。低地部分は人間活動と深く関わっており、残念ながら野生生物への影響も大きい。昨年度はイリオモテヤマネコの交通事故死が最高記録を更新するということも起こってしまった。緊急な対策が必須である一方、一つの安心要素は、後背の国有林が変わらないことである。国有林はほぼ手つかずの状態で維持され続けている。それはヤマネコにとっても他の希少生物にとってもますます重要性が増している。

先日、沖縄森林管理署と私たち琉球大学は、イリオモテヤマネコに関する公開シンポジウムを行った。目的は、沖縄森林管理署がこれまでに長年に渡って地道に収集して来た知見と、国有林および沖縄森林管理署の活動を知ってもらうためである。私はこのシンポの中で、西表の森林について、あるいは森林の利用の際に、「何もしない」ということが一番なのだということをお話しした。森林をよりよくする技術を磨いて来た国有林管理の皆さんにとって、何もしないで欲しいというリクエストは残念な感じをもたれるかもしれない。でも、今後もぜひ、誰も何もしないままに続いて行く森林を維持して欲しい。参加者のア

ンケートからも、森林管理署が希少種の保護の活動をしていることを初めて知って素晴らしいと思った、これからも頑張って欲しいという声が数多く書かれていた。この生物多様性を後世に残して行く上で、私たちの国有林への期待は大きい。

イリオモテヤマネコシンポジウムの模様